



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コミンテルンと世界経済論 (3)の1
Author(s)	嶺野, 修
Citation	北海道大學 經濟學研究, 27(2), 89-108
Issue Date	1977-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31384
Type	departmental bulletin paper
File Information	27(2)_P89-108.pdf



コミンテルンと世界経済論 (3) の 1

嶺 野 修

第一章 初期コミンテルンと戦後「世界資本主義」論 (第24巻第4号)

第二章 資本主義の相対的安定期論の成立 (第27巻第1号)

第三章 相対的安定期論と世界経済論

(1) 民主主義的平和主義の時代観 (以上本号)

(1) 民主主義的平和主義の時代観

第一次大戦後の国際関係を規定づけるヴェルサイユ・ワシントン体制は、列強間の鋭い対立やふくそうした軋轢をうちにふくむものだったとはいえ、この時期に独仏間の国境の安全を保障するロカルノ条約やドイツの国連加盟などで補強され、いわば「帝国主義的協調体制」として現出した。戦後世界の帝国主義的再編成が強力におしすすめられ、「平和」と「安定」に象徴される20年代の国際秩序を構成する柱は、つぎつぎにうちたてられたのである。列強間の国際緊張の一時的緩和にとともに、各国民経済においても本格的に（独占）資本が起動し、加えてアメリカのヨーロッパ介入によるドーズ体制の造出は、戦後世界を「旧態に復する」ととどまらず、資本主義的な「回復と成長」の発展軌道にのせるものであった。このような過程は、独占資本主義的な経済的特徴を、この20年代に全面開花させると同時に「古典的帝国主義段階」とは異なった諸相をも生みだしたといつてよい。かくしていまや、いわゆる資本主義の相対的安定が[・]_・つくりだされたのである。

こうした中で、これまで後退を余儀なくされていた労働運動が、当時期に再び昂揚する兆しをみせる一方、大戦によって解き放たれた植民地従属諸地域の新勢力の胎動、ソ連の社会主義建設など、世界的規模での新しい運動の芽が醸成されていた。

かかる戦後世界を、第2インターのヒルファーディングらが全く新たな資

本主義の組織化時代と見做したのに対し、コミンテルン第5回大会(1924年6～7月)は、「民主々義的平和主義の時代」と把握したわけであった。現実の資本主義世界の動向は、しかし、第2インターはもちろん、コミンテルンの認識をもはるかに超えていたといつてよいであろう。従つてコミンテルンでは、この新しい時代観をめぐつて、これまでそれぞれに伏在して必ずしも明瞭にされなかつたコミンテルン諸家の理論上の相異が、大会後にいっきに噴出するにいたつたのである。コミンテルンのこの論議は相対的安定期論争の発端をなすとともに、コミンテルンの戦後観をもともに浮き彫りにするものであった。やや形式的にいえば、これを民主々義的平和主義の時代観、資本主義世界の安定論、戦後世界(政治経済)の構想という三つの論点に整理することができようが、この節では、これらに関する当時の支配的見解をスターリン、ブハーリン、トロツキーの三人に代表させ、紹介し検討していきたい。

第5回大会のコミンテルンの時代把握に最も近いところから、この「民主々義的平和主義」の時代観を主唱したのはスターリンであつた。スターリンは、自らの世界帝国主義体系論視角にたつた情勢論をはじめて展開してみせるのであるが、その際彼が、後にみるトロツキーの所論¹⁾に対し、「真正面」からの批判を企図したことは、疑い¹⁾えぬところである。

スターリンは、現在の国際情勢を特徴づける三つの「基本的で決定的な契機」(①ブルジョア民主々義的平和主義の時代の到来②ヨーロッパ問題へのアメリカの干渉と賠償についての連合国のロンドン協定③ヨーロッパ労働運動の左傾化とソビエト・ロシアの国際的比重の増大)を挙げ、新しい時代がどうして到来したのかの問題にかかわっていく。新しい情勢のひとつの契機として、政治関係や階級闘争の視角によってソ連の地位そして西欧の労働運動の動向を、彼がおさえているのは、トロツキーやブハーリンにもみられない独自のもので、まず注目しておく必要がある。

24年後半時に、スターリンが与えた情勢の論述には、定安化とか相対的安

定の命題はふくまれていない。彼は新しい時代の出現をすぐれて政治的に解した。大戦や戦後の混乱で弱体化した資本家側が、プロレタリアートとの闘いに決着をつけぬまま、社会民主党をだきこんで「妥協政策」や「迂回政策」として民主主義的平和主義を演出しているのだ、という。この点で、プロレタリアートの力量が未成熟ゆえに、成功すべき革命も失敗し、新しい時代に入ったと説くトロツキーの見解と、いっ見すれば相反している。トロツキーの見解に、従ってスターリンは、「われわれが弱く、資本家が強かったからだ」との観点からしかみない、新しい時代の現出論だと批判した。しかし客観過程にというよりも、もっぱら主体性の強弱に新しい時代出現の根拠を求めることでは、二人とも共通している。またこの限りでは、彼らが第5回大会のジノビエフと同じ観点にたっていたといつてよい。ただ主体的条件の評価に、スターリン(やジノビエフ)とトロツキーの時代把握の相異を顯示するにいたる直接の分岐があったにすぎない。スターリンが論述した要点は、ブルジョアジーの弱さが、この時代を生みだした必然的根拠をなし、この弱さを補完するものとしておしだされてきたのが、戦後的特性たるファシズム形態だ、というところにある。帝国主義の戦後の危機のなかで生まれ、ファシズムと社会民主主義の基本的組織のいまだ形をととのえない政治連合、と独自のファシズム観(社会ファシズム論)を示すことで、彼は時代的特徴づけをおこなった。こうした観点にたつて、彼は、トロツキーのファシズム観を「内乱時代におけるブルジョアジーの戦闘組織」とみて、それが軍事技術主義にいちじるしく傾いた把握だときめつけたのである²⁾。

そのうえでスターリンは、危機が現在のところ潜行しており、やがて必ず顕現するだろうといった20年代に彼がほぼ一貫してもち続けた独自の観点から、トロツキーの情勢論に批判を加えるのである。トロツキーのごとく資本家側が強かったので新しい時代が切り開かれたとか、この時代が長期の「平和」や西欧革命の延期などを意味するとは、決していえない。またヨーロッパにたいするアメリカの干渉が、「アメリカによるヨーロッパの平和」の創出につながったとはどうしても見做しえない。なぜならば、現在ではどんな時

にもまして「帝国主義国家の不均等発展と帝国主義戦争の不可避性にかんする法則」が、作動しているからである。つまりスターリンによれば、新しい時代のなかから潜行している危機が必然的にあらわれ、階級決戦の決着をつけるための闘いが準備されてくるところに、現情勢を危機として根拠づけんとするゆえんがあるといえよう。この危機を現実化するものとして導入されたのが、彼の周知の帝国主義国家の不均等発展の法則であったわけである。スターリンは、レーニン理論を「戦争の時期における帝国主義の研究」と限定しておさえたうえで、レーニンの不均等発展の指摘をとりだし、それを戦争の不可避性に結びつけ、法則にまでたかめ定式化したのである。³⁾

加えてスターリンは帝国主義を、金融的絞殺と民族抑圧の単一の世界的体系と解し、この体系にある4つの矛盾を検出し、不均等発展の法則を現下の状況にあてはめてみせる。戦勝国と敗戦国、イギリスとフランス、イギリスとアメリカ、ヨーロッパと植民地という4つの矛盾による世界の体系把握がそれである。スターリンは、これらの矛盾の根底に資本主義体制におけるアメリカの抬頭があることを重視し、ヨーロッパ資本主義をめぐる国際的相互関係の形成を、ヨーロッパがアメリカの金融的従属に陥る一方で、植民地搾取を続けているところに求めている。彼は、ヨーロッパ資本主義のこの重層性についてもっと洞察を深め、そこからヨーロッパのとくに「特殊なドイツ」の戦略を導出すべきであった。当時のコミンテルンにおいてトロツキーがアメリカのヨーロッパ支配論に、ヴァルガが植民地を喪失したヨーロッパの没落論に、またブハーリンが欧州列強の自立論とかいうようにともすれば、それぞれ一面的な把握に傾斜しがちななかで、スターリンの視角は、彼らへの批判を意味するだけでなく、欧州資本主義の現状を正しく捕捉しうるものであったといえるだろう。コミンテルン（ジノビエフら）が革命の焦点を、ドイツからイギリスに移行したと捉える1925年半ばにも、スターリンは、特殊な問題をやらんだドイツに依然として照準を合せ西欧革命を展望するのだが、24年の当時としては、むしろ不均等性に力点をおき、イギリスとアメリカの帝国主義列強の対立を基調とする世界の分割支配という帝国主義の世界再編

論を主唱するにとどまった。その際、なぜ体系の4つの矛盾が英米対立というひとつの矛盾に収束するのかの論理(＝必然性)を彼は示しえてない。それはレーニンの帝国主義論を土台に据えて戦後の世界政治経済を捉えるというよりも、レーニン理論のすぐれてスターリン的解釈にもとづく、現状への適用だったのである。つまり、大戦後の資本主義世界についても、列強による世界の分割支配という「古典的」な帝国主義論の枠組みを、基本的に前提とする見地にたつとはいえ、帝国主義世界内部における国家間の利害対抗を危機論としてもっぱら追跡する、今日でもよく見られる帝国主義論把握とその現状への適用なのである。このようなスターリン的観点は、トロツキーの戦後世界の構想に対し、不均等発展論による関係論的批判にとどまらざるをえない限界性を示すものであった。

スターリンじしんにとって、たしかに不均等発展の法則論がもつ意義は大きかったといえる。彼はジノビエフ同様に、新しい時代のよってきたるゆえんを政治と経済に分離して説くのだが、自らの捉えた政治における民主主義的平和主義論と経済における「危機＝不安定性」論を結びつけ、そのうえで現情勢の危機的様相を示す論理として、この法則をもちださねばならなかったのである。当時のスターリンが、この法則にもとづいて一国社会主義の勝利の命題に言及してもそれはあくまで副次的であつたろう。彼はトロツキー理論を「アメリカによるヨーロッパの平和」論と見做し、これに対して、戦争期帝国主義論と限定しておさえたレーニン理論から「不均等発展」論を摘出し、ヨーロッパに危機が依然として継続されていることを解明せんと試みたのである。彼は、現情勢の危機＝不安定性に力点をおいて論述しようとして、自らの矛盾論の観点から現下の情勢に胚胎している危機要因を挙げるのだが、それは新しい情勢を規定する不安定性の証明になりえてない。危機要因をとりだすことで、潜在的に「資本主義の危機が継続されている」とか、「安定の中から危機」が激成するとはいえても、現在の情勢がどうであるかの把握には必ずしもなっていない。むしろスターリンの意図に反して、不均等発展の法則論をもちだすことで、現実の資本主義の戦後的な発展を、資本主義国

家の関係論的發展として認める結果になっている。つまり不均等發展論が、内的動力を失ったという彼の戦後資本主義観や危機絶対論と、現実の動向との乖離を、うまく整合しているのである。従って、彼は資本主義世界の「危機」というよりも、結果的には「安定」を唱えていたということになる。この点で後に検討するトロツキーの理論ときわめて対照的であった。トロツキーは、「ヨーロッパの安定」や「平和」を唱えることで、スターリンの危機継続論とおもて向きは鋭く対立していた。だが、彼の主張の底流にある論理をつめていくと戦後世界が不安定性と動揺性を本来的にもつものとして把握されることになるのである。すなわち、彼らの主張の理論的な根拠にまでたちいて検討すると、そこでは全く正反対の見解にいきつく。ここにこそ彼らの対決点があったにもかかわらず、この点における彼らの自覚は稀薄であった。いわば当時期の論争はやや表面的なやりとりで終ったといつてよいだろう。

ともあれスターリンに、「危機の継続」と「相対的安定」を統一して捉える志向がみられても、彼はその統一的把握に成功していない。実際に彼は、その後の論稿で「物事の二面性」とか「プラス面」「マイナス面」あるいは「肯定面」「否定面」とかいう具合に情勢をわけて捉える。それを25年前半時に国際情勢を論じるスターリンのほとんどの論稿にみることができるが、このような模索を通じて、以後彼は資本主義世界内部の安定とソ連の安定およびこの二つの体系の力の均衡が達成されたことにもとづき「二つの安定」論を唱えるにいたる。

かくしてスターリンは、新しい時代の到来→帝国主義の全世界的体系→不均等發展→英米の世界支配をめぐる再分割(=危機)→戦争(の不可避性)、鎖の弱い環の破碎=革命→一国社会主義勝利の可能性という論理展開から、周知のトロツキーの永続革命論やヨーロッパ合衆国論に批判を加えたのである。その際情勢論として、帝国主義の基本法則を不均等發展と見做し、帝国主義である限りあくまでもこの法則がつかぬかれるという、帝国主義法則の貫徹論視角から英米対立を基調とする世界再編=危機激成論を、彼は唱えたのである。こうした彼の観点と共有する面をもつが、戦後世界の主調が各国

列強の対立や軋轢などを通して不断に再編されるところにある、と一般的におさえ、そこから危機の激化を予見するのがブハーリンであった。つぎに彼の所説にかかわりたい。

- 1) スターリン「国際情勢について」1924年8月(邦訳スターリン全集第6巻293～313頁)。同「10月革命とロシア共産主義者の戦術」(以後「共産主義者の戦術」に略)1924年12月(邦訳スターリン全集第6巻374～420頁)。
- 2) スターリン「国際情勢について」(邦訳全集295～297頁)。および中間勢力主要打撃論については「共産主義者の戦術」(邦訳全集第6巻403～405頁)。
- 3) スターリン「共産主義者の戦術」(邦訳全集第6巻386頁)。傍点引用者。リトヴィノフ「1925年前半時の世界資本主義」(邦訳『マルクス主義』大正14年12月号60頁)をも参照。

ブハーリンは、かつて(1923年)帝国主義列強の「息つぎ」をもって「安定」現象と見做した。この「息つぎ」論は、帝国主義国家の支配体系相互の均衡ができあがったことを根拠にもつものであった。だが均衡の達成にもかかわらず、彼は戦争と革命の結果たる世界資本主義の有機体系の破碎が克服されないとみていた。このような視角をうけてブハーリンは論文「現代資本主義の諸矛盾」²⁾で、現代の資本主義的発展のアウト・ラインを素描した。ここでは民主主義的平和主義の時代観や安定の問題に直接言及されていないが、それはヒルファーディングの論稿「時代の諸問題」を批判する形をとった間接的なトロツキー(ラデック)批判であった。あらたな時代の分析視角としては、「大戦清算論」を起点にしたブハーリンの資本主義発展史観の再現であったところに、おのずから一定の限界性をもつものであった。

新しい時代の開始を、彼は帝国主義的対抗としてはじめて「全世界を席捲した戦争が清算」されたところにおく。つまり「大戦清算」論を起点に据える。そうして、この時代を分析する際、自らの帝国主義論的見地があらためて有効であることを確認しつつ、現代の時代に①共産主義社会の全面的な組織化のための物的条件がほぼ完全に準備されている社会、②革命と階級対立の未曾有の激成、競争・恐慌・戦争など資本主義的諸矛盾が不断に再生産される時代、と大まかな規定を与えた。彼の所論の趣旨は以下のごとくである。

ヒルファーディングが唱えた資本の組織化論は、これまでわれわれ(ブハ

ーリン)がいくども公式の文献で確認してきた資本主義の組織化傾向という事象の半面をえがいているにすぎない。いま必要なのは、各国内部で自由競争が廃絶され、生産の無政府性が克服されても、それゆえにいっそう国家(=国民経済)間の自由競争が増幅し、従って世界経済の無政府性=矛盾が激しく深化・拡大するという事象のもう一面を具体的に摘出することである。ヒルファーディングは、世界経済におけるドル支配の仮象をみているが、統一性を失った「世界経済の崩壊」や解体という実像に注目すべきである。国民経済においてたとえ恐慌が克服されても、世界的には「破滅的な世界恐慌」(=戦争)が発現するのは、いずれにしろ不可避である。

彼は、アングロ・サクソン資本の支配に、政治的・イデオロギー的に捫腕している。それは、たとえば資本主義と戦争の不可分の関係を否定したり、国連やイギリスの主権拡大やドル支配の賛美にうかがえる。結局のところ、彼の主張の要点は、あのカウツキー的な超帝国主義論につながるものである。ところで帝国主義同盟とか超国家組織や、世界的組織化の極限である単一の世界トラストが実現する条件は、①協定②強力なグループの闘争での勝利、とかの二つの条件のどちらかでなされるというのが、われわれ(ブハーリン)の見解であった。これを現下の状況に適用すると、①の条件は勢力均衡を前提とするので、該当しない。②はアングロ・サクソンの主権が拡大し勝利したという点で合致するが、しかし国連の内部や「主権」内部には、ヒルファーディングの述べたのと異なり、統一がない。アメリカの勝利が多分に事実としても、現況は「アメリカによる組織された資本主義」からはるかに隔たっている。トロツキーは、アメリカがヨーロッパに「食糧配給体制」の創出を意図し、いまやそれを実現したと述べたが、これはあまりに非現実的だ。現在の世界像は、彼らが把握したほど単純でない。なによりもヨーロッパ内部の相違や対立を無視すべきでない。アメリカ的な拡大傾向がたとえ継続されようとも、その反面で植民地の問題とか日米の対立などぬぎがたい矛盾を、戦後世界(政治)経済がかかえており、情勢はもっともっと複雑である。

かかるブハーリンの視角からすれば、ヒルファーディングの世界経済「常

態化」論やトロツキーのヨーロッパ対アメリカという国際連関を通して達成された戦後世界資本主義の国際均衡回復論は、あくまでも一時的な様相で、それを仮象でしかないと彼がきめつけるのは当然であつたろう。すなわち、ブハーリンによれば大戦が清算され、資本や独占資本がたとえ自生的展開をあらためて開始したとしても、やはり戦後段階でも、資本の運動が一方における国民経済の国家資本主義トラスト（彼は、ボリスの批判をうけて以後、20年代末までこの概念をあまり使用しない。代ってこの頃からヴァルガがこれを随所で乱発する）化を生み、組織された資本主義にいたる。他方で資本主義的なあらゆる矛盾は、世界経済場裡に集中して顕現せざるをえない。ましてや戦前と異なり、戦争で不統一性や多様性として条件づけられた戦後世界経済における資本の活動は、戦前と比較にならぬほど制約されている。ここに諸矛盾が激しく露呈せざるをえない必然がある。戦後資本主義の帰趨は、世界経済における国民経済や国家資本主義トラストの運動にもっぱらかかわっている。つまるところそれは世界恐慌たる戦争にいたるが、当面の問題は、この世界経済に顕われてくる諸国民経済相互の相違・対立・矛盾を検出することにある。ブハーリンの情勢論の骨格がこれである。従ってブハーリンは、当面する情勢をこの所論では、資本の運動法則から説きおこし、資本の運動のあらたな態様をひとつの理論体系に構想したとはいえ、あらためて自らの理論体系の枠組みにそれらを包摂して主唱したわけである。つまり、明確なブハーリン的方法の新たな時代への適用であつたといえる。またスターリンと新しい時代のなかから危機が激化するという観点を共有していたとはいっても、情勢論の組立て方は大いに異なる。新しい時代をスターリンが国際的相互関係の新たな形成のなかに具体的にみようとする点では、むしろスターリンはトロツキーと共通していた面がある。ブハーリンは大戦清算論にみられるごとく一般的に（固有名詞抜きで）帝国主義国家の支配体系相互の均衡の達成というところから新しい時代の開始をつかまえていたようである。戦前とは異なる戦後的な世界連関から情勢論を構想する志向は、ブハーリンにあまりなかったといわねばならないだろう。ブハーリンは後年トロツキーや

トランなどからアメリカの比重を考慮してないとよく指摘され批判されるが、それもこのようなブハーリン的特性に根拠をもっているものであり、ブハーリン批判に際し、彼の方法的欠陥をこそ彼らは衝くべきであったであろう³⁾。さらにブハーリンのこの大戦清算論を起点とする戦後世界の構想は、戦後性を特徴づける独自の論点、アメリカの抬頭のみならず、たとえば戦勝国と敗戦国の矛盾や新たな資本の運動によって生起する矛盾を、ことごとく世界経済という場におしこめ、ひいては列強（国家資本主義トラスト）の市場獲得闘争とか実現問題に矛盾のすべてを一面化するような欠陥をもつ理論構造だったのである。ブハーリンのかかる視角を、拡大再生産論と彼なりの「独占資本主義」(国家資本主義トラスト)論をもって、レーニン理論と整合させながら統一化し、叙述したのが『帝国主義と資本の蓄積』であるが、これについては次節でみることにする。

戦後の世界経済と世界政治が、戦前に見られなかったような列強間の歴然たる対立をもち、多様性、不均等性、不統一性（ブハーリンの不均等発展論！）を顕著に反映する常時不安定なもの（＝全般的危機）になった、とブハーリンは見做したわけである。24年のこの所論で彼は、スターリンと同じく資本主義の相対的安定の命題の論述や安定概念を与えていない。むしろブハーリンも危機や軋轢の激化として今日の情勢を捉えねばならないと述べ、その具体的分析の必要を提起することで、間接的に「安定」を否定していたといってよいだろう。この点でブハーリンもスターリンと同様に、相対的安定をいうトロツキーに対し、いっ見すると正反対の視角から情勢論を唱えたのである。だが所詮は、列強対立を基調とする戦後世界の再編過程の「複雑さ」を、多様性や不同性認識としてトロツキーのアメリカ的な単一の世界体系の実現論に對置したにすぎなかったのである。こうしたスターリンやブハーリンの批判を呼びおこしたトロツキーの当時の所論の紹介と吟味を通して、彼らの批判の正否を以下でたちいてみてみたい。

1) 拙稿「コミンテルンと世界経済論」(1)北大『経済学研究』第24巻第4号368頁参照。

2) N. Bucharin. Die Widersprüche des modernen Kapitalismus, in: "Die Internationale" 1924. Heft 18.

3) トロツキー『レーニン死後の第3インターナショナル』(1969年現代思潮社)
Treint. Protokoll der Erweiterten Exekutivie der KI, Nov-Dez 1926, ss. 158~160.

トロツキーは、第5回大会後いちはやく戦争から戦後にわたるひとつの時代の終焉と新しい時代の開始を宣した。論稿「世界的発展の展望」がそれである。そこで彼は、資本主義的發展の終ったところから発する戦後資本主義世界体系の存立と運動の態様を、アメリカ的な単一の世界体系論にまとめ、提示したのである。トロツキーの戦後アメリカ的な単一の世界体系論は、彼がヨーロッパとアメリカの關係把握にもとづき、ヨーロッパ(全世界)に新たな支配と従属の關係をつくりだしたと見做す、戦後アメリカ的な支配体系を摘出し構想したものにはかならない。つまりアメリカ的な世界支配の枠組みに旧列強諸国が編入され、いまや旧列強ヨーロッパはその各構成部分を占める一単位にすぎなくなった(ヨーロッパにおける民主主義的平和主義時代の到来)、かかる意味で戦後の資本主義世界(アメリカとヨーロッパ)は相対的安定を迎えた、というのがこの所論におけるトロツキー理論の要点である。

彼の所論は、前述したスターリン(やブハーリン)の批判を呼んだわけだが、彼らの所説が、概して民主主義的平和主義の時代観、相対的安定論や戦後世界の構図をそれぞれ不統一なままに論述していたのに比較して、これらの論点を統一的に把握し、彼なりの徹底した理論化にある程度、成功しているといつてよいものである。それはまた、相対的安定期における、トロツキーの均衡論的資本主義観と永続革命論の新たな適応とみても間違いない。

トロツキーの所論にかかわる前に、いささか性急にすぎるとも思えるが、あらかじめつぎのことを指摘しておきたい。彼はこれまで戦後資本主義世界の変化を国際關係の変化にのみ求め、初期コミンテルンの共通の見地でもあった資本主義の自律的展開の否定に徹してきたのだが、この所論でも基調はそれである。とすれば、彼の把握は、資本の運動がもたらす新しい情勢や経済的諸相のもつ質を全く洞察しえないという基本的欠陥を、おのずから含まざるをえない。ここにトロツキー的戦後論の弱点や欠陥が露顯されていると

いってよいが、第2次大戦後の世界把握にはともかく、20年代の世界情勢を把握するに際し、その意味でトロツキーの理論的制約性はまぬがれがなかった。トロツキー理論はコミンテルン情勢論を一時期支配する³⁾とはいえ、コミンテルン内での批判によるというよりも、むしろ安定期資本主義じしんに乗り超えられてしまうのである。それは彼の世界資本主義論の破綻を示すものであったといえるだろう。以下彼の所説を概観したい。論稿は9節からなっている。

①大戦前の資本主義世界において、社会主義的な物質的基盤（トラストやコンツェルンおよび階級関係をトロツキーは挙げている）がすでに完全に成熟していたにもかかわらず、ロシア以外で革命が敗北したのは、プロレタリアートの弱さ、つまり断固とした決意と能力を欠いていたからである。「意識が存在に遅れて」いたのだ。しかし大戦を機に世界は全く変った。「生産力が零落する戦後ヨーロッパ資本主義には、破壊に対する再建のみがあり、生産諸力の展開をこれ以上になしうる力はない」。生産手段の私的所有とヴェルサイユ講和による民族国家の枠組みが、生産力発展の桎梏になっている。「われわれは革命の時代に突入した。」これが大戦後の基本的な歴史観である。

②1921年のドイツを頂点に、戦後の革命的攻勢は終った。プロレタリアートの未自覚のゆえに、ドイツ革命は崩壊し、資本主義の均衡が回復した。資本家側は、ファシズムに替えて民主主義的平和主蔭をもちだし、それで権力を維持しはじめた。新しい時代が切り開かれたのだ。

③プロレタリアートの攻勢を撃退し、社会的均衡をえた資本家側に、ファシズムを動員するほどの脅威はなくなった。しかし独自に社会を統治しうるほどの強い社会的政治的支柱もない。この不安定のゆえに「メンシェヴィキ主義」がおいってきたのだ。ファシズムとは、国により異なるし、その社会的編成もまちまちだが、「本質に即していえば、内乱において、プロレタリアートの攻勢を撃退し、緊迫したブルジョア社会を維持するための、能動的なグループである」。ファシズムは、議会主義に依拠したブルジョア国家が、危機に陥っているにもかかわらず、資本家じしん合法性の枠を突破しえない時にあらわれる。ブルジョアジーが合法性の束縛から解放してやり、ブルジ

ヨア社会の秩序維持のためにあらゆる方法手段をとることを義務づけたところの社会勢力、これがファシズムである。それは内乱の時代におけるブルジョアジーの組織である。ブルジョアジーが「正常な国家装置」を回復するか、プロレタリアートが勝利すれば、ファシズムはおのずから消滅する。また、いまの「平和主義的改良主義」時代は、かつてのロシアの「ケレンスキー体制」とも異なる。

④戦争以来、貧困化した大陸ヨーロッパに改良をおこないうる経済的基礎はない。しかし、現在のヨーロッパに「通貨の安定」とそれによる「労賃の安定」がある。すなわち「通貨と労賃の安定」をえたことで、ヨーロッパにあの「相対的できわめて動揺的で、不安定な均衡」を達成することができたのだ。これが現在の「改良主義的・平和主義時代の最も主要な基盤」である⁴⁾。だがたとえばドイツでこの均衡が失われると、その時はまた革命情勢だ。

ところで、ヨーロッパじしんは戦争以来、資本主義の自律性を失ったので、独力で「経済的均衡の堅固性、相対的・一時的均衡、とくに労賃と為替の安定」を達成しえないはずだ。ここでわれわれ(トロツキー)は、人類の最新の歴史像の焦点に北アメリカ合衆国をおしだす。いまや合衆国の世界史上に占める意義を考慮しないでは、誰も世界プロレタリアートやヨーロッパの運命を明らかにしえない。資本主義世界の主人は、ニューヨークやワシントンにいる。ヨーロッパに秩序を回復し、ヨーロッパ支配のための「輸送計画」をつくり、アメリカはいまやそれを実現した。アメリカ資本の力は、かつて鉄と石炭の総和で世界を支配したイギリスを全く問題にしない。想像を絶する経済力である。戦後世界に占めるアメリカの位置とその動向は、「ヨーロッパと世界の歴史上で最大の問題」になった。ヨーロッパ人民に取るに足りない役割しか果していない各国通貨は、ことごとくドルに依存し、ドルの通貨圏に包摂された。

⑤アメリカは19C末からすでに帝国主義的世界政策を追求し、略奪者の道を歩みはじめたが、「平和的」・「民主的」な国という名声をえている。ここが旧世界の帝国主義と大いに異なるところである。アメリカの平和的仮面を剥

ぐのは、たしかに難しい。さしあたり軍隊なしでも安全な地理的条件（大陸国家）と世界市場に遅れて進出せざるをえなかった歴史的條件（門戸開放政策）に、それは発していると考えられる。

このアメリカが、ヨーロッパ企業の経済的隷属化をはかり、ヨーロッパを支配するために乗りだしてきたのだ。つまりアメリカの国内市場は、農工や東部と西部の国内均衡を土台に安定をえていたが、農業恐慌の勃発で、不安定な均衡に代り、海外へ向わざるをえなくなった（第5回大会の経済報告をおこなったヴァルガによるアメリカの対外進出の動力観と軌を一にしているのを想起せよ！）。

⑥アメリカ資本は、ヨーロッパ市場を再建し、安定を求め、ヨーロッパに支払い能力を創出することが、その目的であるとよくいわれたりする。それは否定できないが、真のねらいは「地上にアメリカ帝国主義の絶対主義を実現」するために、資本主義ヨーロッパを統合支配し、「糧秣化」するところにある。「ヨーロッパ・ブルジョアジーに代って、ヨーロッパ内部を分割統治し、彼らに世界市場分割をおこなわせるのだ」。アメリカ資本は、いまや自己の金融力や経済力を外交権や政治力と結びつけ、ヨーロッパという世界市場の管制高地を掌握した。それはヨーロッパの生産、市場、金融の全領域におよびアメリカの新たな支配機構を形成しつつあるのだ。従って、ヨーロッパ列強の政治主権（＝国家）も空洞化し、アメリカ資本の意向に直接うごかされることを、それは意味する。アメリカ的なこの糧秣化と統合支配は、イギリスをも例外としない。アングロ・サクソンブロックをいまのところ形成しているが、いずれイギリスはアメリカに支配されよう。

⑦アメリカ資本のこの力をもってしても「ヨーロッパを植民地化し、アメリカの構成部分（自治領）に編成するのに、使節をヨーロッパに派遣するだけで充分」でなかった。アメリカ資本の「なすべき課題」を担った政党＝社会民主党を必要とした。つまりアメリカは社会民主党をだきこみ、彼らをヨーロッパ糧秣化のための政治的代理人に据えた。また社会民主党も「本来の支払い能力ある主人」の政治的従属物になることで、アメリカニズムと古い

「精神的共同体」の統合体として第二インターを再建したのだ。

⑧こうしたアメリカの世界再編と支配をめぐる最大のライバルはイギリスであり、戦後世界の基本的対抗も英米の対立を基調とするものである。今のところ「アングロ・サクソン同盟」を形成しているが、その実体は、ポンドの零落とドルの力を自覚したイギリスの資本家が、未だ田舎者で世界政策の実務に通じていないアメリカの資本家に代り、業務協力しているにすぎない。あらゆるものを自国内で生産し、しかも世界経済に占める生産物の割合（ここでトロツキーは、農産物、石油資源、鉄鋼、自動車、金準備などの経済的数値を挙げる）が圧倒的に高く、さらにヨーロッパ各国の倍をうわまわる「国富」をもつアメリカの経済力は、他国を絶対によせつけない「バビロンの塔」である。アメリカの「平和主義的」膨脹は、ヨーロッパを植民地化した現在、中国やオセアニアに向いている。従ってイギリス資本がアメリカに対する協力で一時的な収益をえても、アメリカによる大英帝国への蚕食は続き、名実ともにアメリカ経済の世界支配（イギリスの糧秣化）が実現されよう。イギリスの弱体化とアメリカの強化を必定とするこの「活動共同体」の衣の下に、戦争につながる爆発物が、隠されているのだ。

⑨各国民的な諸領域（全世界）を、アメリカ的な単一の網の目を通して統合し、それじしんを構成部分と化す「アメリカ的な平和主義の綱領」は、平和でなく戦争と革命をうちにはらんでいる。なんらかの抵抗をひき起すことなしに、全世界を「支配管理」するのは不可能だ。新たなタイプのアメリカ的支配は、ヨーロッパの不安定な均衡回復という、西欧を変質させる成果をあげた。しかしヨーロッパに戦争をひき起した民族国家やその対立は止揚されておらず、むしろアメリカは対立を客観的には激成している。

このような戦後のアメリカ的な単一の世界体系から導出すべきプロレタリアートのスローガンは、「ヨーロッパ社会主義合衆国」、「ソ同盟に連合した調和ある労働者・農民のヨーロッパ」である。アメリカはまた中国に進出せんとしているが、中国や東洋が同盟すべきは「レーニン」である。ヨーロッパとアジアで帝国主義アメリカと革命的ボルシェヴィズムがあい衝突している。

これが新しい歴史を推進する基動因だ。レーニンがいったように、われわれじしんがアメリカ化し、帝国主義アメリカを「アメリカ的ボルシェヴィズム」が克服し勝利することである。

以上がトロツキーの論稿「世界的発展の展望」の大意である。みられるように彼は、この論稿で、以後20年代の彼の理論を特徴づける多岐にわたる論点に言及している。たとえばファシズム（＝ボナパルティズム）論や革命観、社会民主党論、アメリカ論など、いわば彼の理論の原基形態の全容が、ほぼあらわされているように思えるが、ここでは「民主主義的平和主義の時代」観に關説するにとどめたい。

トロツキーのこの所論に対し、先にみたごとく、スターリンやブハーリンがそれぞれ独自の見地からただちに反論を加えた。彼らの批判の焦点は多少の相違はあれ、一口でいって、トロツキーのいうアメリカのヨーロッパ支配による西欧資本主義の社会的経済的政治的「均衡」が、できあがったところを衝くものだった。つまり外因論批判である。アメリカによる「ヨーロッパ糧秣化」論は、コミンテルンが宣した世界革命の新しい時代を根拠づける危機の存在をみようと思わず、西欧革命を不当にもはるかかたに追いやるカウツキー、ヘルファーディングばりの超帝国主義論だとする批判であった。彼らは、ヨーロッパに達成された「均衡」が脆いものであり、やがて崩れるだろうと予見し、その要因を帝国主義的な各国間の対立拮抗として析出し、そのことで危機の存在を根拠づけんとしたわけであった。しかしながら、彼らの行なった批判も、新しい時代が開始されたばかりという歴史的制約をうけていたとはいえ、つまるところトロツキーのヨーロッパ・アメリカ関係論に対し、各国間の不均等発展論を対置する関係論的批判であったという点で、問題をもつものであった。後年コミンテルンで、相対的安定期のなかで情勢論を構成する際、不動の位置を占めるにいたる不均等発展論は、このようなかたちではじまったのである。その反面で、トロツキーが述べたアメリカを自律的中枢とする単一の世界体系への資本主義世界の再編論は、超帝国主義論だという解釈に収束されていくのである。

ところでトロツキーは、アメリカ・ヨーロッパ関係視角にたって新しい時代のよってきたるゆえんを彼なりに解いてみせたのであるが、その際、「民主々義的平和主義」時代の現出を、まず階級間の力関係の変化のうちに求め、その前提のうえで経済分析に入っていく。この点では、コミンテルンの他の論者と変わりがない。またすでに述べたごとく、彼がこのヨーロッパ対アメリカ視角を情勢論の中心に据えて説くやり方は、第4回大会での報告からであったが、それは、いわば彼の世界の均衡体系論の破綻をつくらうものとして提起されたのであった。そしてヴァルガが第5回大会報告で与えたアメリカの対外進出の動力観あるいはアメリカ論と軌を一にした把握にもみらるるように、このトロツキー的観点は、はやくからのヴァルガの視角（たとえば「過剰生産領域」と「過少生産領域」への二大区分論）でもあったといえる。そのためか、トロツキーが、ヨーロッパの没落とアメリカの膨脹を統一化し、世界経済の矛盾の焦点をそこにもとめる構想を提起した時点では、このヨーロッパ対アメリカ論そのものを論題とする議論はコミンテルンではほとんどなかった。それは次節にみるラデック・ペッパー論争からはじまったのである。この24年後半時には、スターリンの論述にもみられたように、新しい時代の開始が、アメリカのヨーロッパ進出とわかちがたく結びついており、かかる点ではコミンテルンにおいてのみならず、第2インターをも含めほぼ共通の認識にたっていたのである。その際トロツキーは、ドルによるヨーロッパ通貨の支配と社会民主党や第2インターのアメリカ化を實體とする、アメリカ（イギリス）のヨーロッパ統合支配と自治領論にもとづく戦後世界（ヨーロッパ）の相対的安定論を唱え、またヒルファーディングらは、生産技術、経営様式や生活様式までもふくむアメリカ化の展開を予見する、組織された資本主義論を構想してみせたわけである。こうした把握の類似性が、本来、全く相反する20年代の資本主義認識にもかかわらず、ブハーリンのごとくトロツキー理論をヒルファーディングの所論と同じものと見做す批判を誘発したといえる。

トロツキーの新しい時代観の主なねらいは、つぎのところにあったと解すことができよう。大戦後、世界政治経済上で唯一の自立⁵⁾的帝国主義としての

地位をたもっていたアメリカじしんが、国内均衡を農業恐慌により破砕されたことで、自立性を失い、「それじしんで存在しえなく」になった、つまり対外的均衡をえる志向（＝「平和主義」的膨脹）を、いっそう不可欠とするにいたった。このアメリカの志向が、じしんの圧倒的な経済力とあいまってアメリカ的な単一の世界体系を創出したのである。すなわちアメリカの対ヨーロッパ進出がアメリカの外的均衡をえる志向の一環をなし、アメリカは「ほんの小指の力で」即時、ヨーロッパを支配統合した。これで西欧は、通貨の安定による経済的均衡を、労賃の安定による社会的階級的均衡を、社会民主党のアメリカ化と内閣の組織による政治的均衡をえた。そして他方でアメリカとヨーロッパの相互の関係から外的均衡たる国際均衡も達成された。まさしくトロツキーによれば《世界はいまやアメリカである》というアメリカ基調の戦後世界が現出したのである。このような意味でトロツキーの所説は、徹底した世界の均衡体系論の観点で一貫しているといえるのである。

彼の説く相対的安定期論は、従ってアメリカ的な単一の世界体系じたいが、相対的一時的安定をえたことであり、その「一構成部分」であるヨーロッパ資本主義もその限りで均衡をえた（＝「民主々義的平和主義の時代」の到来）という趣旨にならうか。しかしアメリカ的な支配体系も、すでにアメリカ経済が自律(立)性を欠き、唯一アメリカが他国に比して圧倒的な経済力をもつことで体系は支えられおり、安定といっても本来的に動揺的で不安定なものである。加えてかかる世界体系の創出は、不断に各構成部分からの反作用を中枢部アメリカじしんがまともにうけることで、体系の動揺性にいっそう拍車をかけられることを意味する。いずれ文字どりの戦後世界の全面崩壊＝全般的危機が勃発する条件は、着々と整いつつある、「世界的発展の展望」におけるトロツキーの主唱の核心がこれなのである。

とすればスターリンやブハーリンからのたとえばトロツキー理論には危機論がないという批判は、的の外れた、到底トロツキーを納得させるものではなかったといわざるをえない。むしろトロツキーにこそ危機を強調するニュアンスが色濃くにじみでている。彼らが、そもそもトロツキー理論を正し

く理解したうえで批判を加えたのかも疑問とするが、もしあえてトロツキー理論に対し問題に付すべき論点があるとしたら、つぎのようなことであつたであろう。その第1は、経済的均衡、社会的階級的均衡、政治的均衡、国際的均衡などの概念を基準とするトロツキーの単一のアメリカ的な世界体系論、世界の均衡体系論にある。第2は、トロツキーの戦後の歴史観である。つまり資本主義的發展が大戦を機に終つたところから構想する戦後世界観にある。第3にトロツキーは、単一のアメリカ的均衡体系がいつどのように破砕され崩壊するのかの観点から危機の成熟を執拗に追跡するが、この危機と危機として発現する経済基盤—それはまた社会主義への物的条件を日々成熟させている—の統一的把握の体系を提示しえてないことにある。⁶⁾

さしあたり、このようなことを指摘しうるが、当時のコミンテルン内での批判は、ここまでたちいて考察したものはなく、それが可能となるには、相対的安定期の資本主義の経済成長という現実の資本の運動展開をなお必要とするのであつた。

- 1) L. Trotzki. Aussichten der Weltentwicklung, in: "Europa und Amerika" 1926 Berlin. ss. 50~92. К вопросу о перспективах мирового развития, «Известия», 5 августа 1924г, стр. 3~4.
- 2) トロツキーがこの論稿でうちだしたアメリカのヨーロッパ支配論と「英米活動共同体」論のはらむ問題については、拙稿「コミンテルンと世界経済論」(2)北大『経済学研究』第27巻第1号、227頁をも参照願いたい。
- 3) J. Pepper. 3 Jahre Kommunistische Internationale, in: Jahrbuch für Politik-Wirtschaft Arbeiterbewegung 1925~26, 1926 Berlin, ss. 10~31.
- 4) トロツキーは、概念的に「均衡」と「安定」を区別しているが、しかし實際上、「相対的安定」という用語を、トロツキーがこの所論で、はじめて使つたといつてよい。このあとラデックも使用するが、彼らは「経済自律性」を欠いた戦後資本主義の安定を指して相対的安定と表現しているようだ。コミンテルンの主流的見解では、25年ごろから「安定化」とか「一時的部分的」という表現が使われ、戦後経済が戦前水準を突破した26年ごろから「相対的安定」なる用語が用いられるように思える。なお E. Varga. Wirtschaft und Wirtschaftspolitik in 1. Vierteljahr 1925, in: "IPK", 8 Mai 1925. Nr 77. s. 1018. も参照。
- 5) 24年の半ばには、第2インターにおいてヒルファーディングのみならずO・ライヒターやO・パウアーなども「組織された資本主義」論を唱えるが、彼らの所論は、当然にもコミンテルンからの批判を呼びおこした。パウアーやライヒターの

所論は、Der Lebendige Marxismus, Festgabe zum 70. Geburtstag von Karl Kautsky, 1924 (Verlag Detler Auvermann KG Gashütten in Taunus 1973), ss. 45~100 u ss. 407~464 にみることができる。

- 6) 次節でみるが、ブレオブラジェンスキーが著書『新しい経済』で、このトロツキ-的欠陥を補完して、理論的な「解」を与えんとしたように思われる。

以上、コミンテルン第5回大会以後、新しい時代観をめぐって輩出してきたコミンテルンの情勢分析論を、スターリン、ブハーリン、トロツキーらに代表させてみてきた。大戦に継起した危機の時代をどうみるか(=総括)に違いはあれ、彼らは共通して民主々義的平和主義の時代を、戦後の時代の到来とうけとめ、戦後世界の構図をデッサンしはじめた。スターリンは、英米対立を基調とする金融的絞殺と民族抑圧の帝国主義世界体系に、ブハーリンは、諸列強の対抗などを焦点におく帝国主義(=国家資本主義トラスト)の均衡体系に、あるいはトロツキーは、それじしんが安定をえたアメリカ的な単一の世界体系(=ヨーロッパの安定)とかいうぐあいに、それぞれ三様の提起がなされていた。だが当時のコミンテルンでは、このような戦後世界政治経済の体系的構想にまでおよぶ、たちいった検討は殆んどなされなかった。またおしなべて危機の成熟や矛盾の発現に分析の焦点をあわせ、そこから情勢論を組み立て、西欧中心の革命を展望することでは、それぞれに相異はない。ただ後年(1928年)トロツキーは、情勢を説く際、ヨーロッパの内部条件からかアメリカから発するのかと分析視角の相異を整理してみせるが、つまるところ彼らの主要な対決点は、各国資本主義とりわけ西欧資本主義の自生的・自律的展開が戦後段階にもありうるか否かにつきるように思える。それが、この論争で次第に顕示されてきたといえるだろう。

24年未からのブルジョア政党による政治支配の本格化は、それを条件として、西欧における「資本の運動」の再開、つまり資本家の攻勢=資本家的回復と成長への開始をつげるものとコミンテルンにおいてうけとられた。コミンテルン第5回ブレナムで「一時的部分的安定」を宣するまでには、なおひとつの論争一戦後世界政治経済の体系的構想それじたいの検討一をへなければならなかったが、それは節をあらためて論じていくことにしたい。